喪服を着た芸妓

紫 李鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生まれてすぐに母親を亡くした千代は、乳母の佐江に育てられた。十八年後、千代は芸妓になると、松枝の男に近づいた。

目次

6 ……30
5 ……24
4 ……18
3 ……12
2 ……7
1 ……1

1

松枝が善蔵の後添えになったのは十九歳の時で、先妻の加代が千代を産んですぐに逝去して間もなくのことだった。産後の肥立ちが悪かった加代は、若い身空でこの世を去った。

善蔵の家は先代の暖簾を継ぐ、老舗の酒店で、主の亀吉を亡くした今も続いていた。亀吉の未亡人、キヨは気丈な女で、亀吉亡き後も如才なく老舗の気品と風格を守り続けていた。

松枝は祇園の芸妓で、一目で見初めた善蔵が水揚げして後妻に迎えた。松枝と入籍し、一緒に暮らすようになって間もなく、善蔵は体調を崩して床に臥せてしまった。

「あないに元気にしとったのに、難儀なこっとすなぁ」

近所の者は、口々に松枝を疫病神呼ばわりした。

善蔵が床に臥してからは、松枝は寝室を別にして、善蔵に付き添うこともしなかった。千代の面倒も怠っていたため、キヨは乳母を雇うしかなかった。

訳ありの子を産んで間もなく里子に出したと言う乳母の佐江は、鞠のように張った乳

房を千代に含ませながら、我が子のように接していた。
五坪ほどの中庭には、可憐な秋桜や清楚な小菊が咲き乱れていた。
「あんたに来てもろうてほんまに助かってます。おおきに」
庭の花を眺めながら千代に乳を与えている佐江に、キヨが礼を言った。
「奥様、とんでもあらしまへん。うちこそこないな可愛い子のお世話させてもろうて、ほんまに感謝してます」
キヨは、佐江のその言葉に、苦労した人間の配慮を垣間見た思いだった。
善蔵の病は一向に本復の気配を見せなかった。主治医の菅井は、不治の病とだけ告げるに留めていた。完治の見込みのない善蔵を、キヨは不憫に思いながらも、ただ見守るしか術がなかった。
一方、キヨの人の良いのをいいことに、程度を逸脱した松枝は、傍若無人に振る舞っていた。日が沈む頃には酒を呷り、時には芸妓時代の友達を招き入れることもあった。
そんなある夜。松枝の部屋のどんちゃん騒ぎでキヨは目を覚ました。キヨがいくらお人好しでも、限度がある。到頭、堪忍袋の緒が切れた。
渡り廊下を大きな音を立てて歩くと、松枝の部屋の前に来た。
「松枝はん、うちには病人がおりますんえ。もう少し静かにしてくれまへんか」
障子越しに言った。

「へぇ。お義母はん、すんまへん。気い付けますよってに」
松枝がしおらしい声を出した。ところが、キヨが背を向けた途端、人を莫迦にしたような、松枝と女の下品な笑い声が聞こえた。キヨは足を止めると、大きくため息を吐き、松枝の部屋に振り返ると、悔しそうな顔で睨み付けた。

善蔵は日に日に痩せ細り、曾ての溌剌さはどこにもなかった。
「……お母はん。千代はどないしてます?」
目を閉じたままで訊いた。
「へぇ。元気にしてますで。連れてきまひょか」
「あかん。病気移るかもしれへん。……お母はん。俺、まだ二十五やのに、死ぬのんか?」
「何言うてんねん。あんたが死ぬわけあらへん。阿呆なこと言わんとき」
キヨは精一杯に平常心を保った。そして、自分の部屋に入ると、声を殺して泣いた。
一方、松枝はキヨに咎められてからは、外出するようになった。その口実は、華道だった。
「ほな、お義母はん、行ってくるさかい」
しおらしい口調で三つ指をついた。

「……行っといでやす」
キヨは裁縫の手を止めず、一瞥した。
外に男が居るのは、年の功で感付いていた。しかし、善蔵が惚れて後妻に迎えた以上、簡単に追い出す訳にもいかなかった。

――それは、キヨが寝付いて間もなくだった。善蔵の部屋から呼び鈴が鳴った。キヨは急いで身を起こすと廊下を走った。
障子を開けたそこには、善蔵の白い顔に黒々とするものが、月明かりにあった。急いで灯りを点けると、それは、口から噴き出した真っ赤な血だった。
「ぜ、ぜ、善蔵！」
魂消たキヨは、大慌てで菅井に電話をした。松枝は帰宅していなかった。
善蔵の顔や手に付いた血を、キヨは綺麗に拭いた。
「……お母はん。松枝なんか貰うてすまへんかった」
「もうなんも喋りなさんな」
キヨは悔しさを噛み締めた。

菅井が駆け付けた時には、善蔵は既に息絶えていた。キヨは慟哭という渦の中で身悶

えた。滅多に夜泣きをしない千代が、キヨの部屋で声を上げていた。
善蔵の死を機に、キヨの気持ちは決まった。――松枝が帰ってきたのは明け方だった。抜き足差し足で廊下を歩く松枝に声を掛けた。
「松枝はん、ちょい来てくれまへんか」
その言葉に、ピクッと肩をすぼめた松枝は、ゆっくりとキヨに振り向き、しくじったような戯(たわ)けた表情をした。
すやすやと寝ている千代を横目に、松枝はキヨの前に正座した。
「お義母はん、遅なってすんまへん。友達に遇(お)うてもうて」
「そんなことどうでもよろしい。……善蔵が死にました」
「えっ……」
目を見開いた。
「単刀直入に言わせてもらいます。善蔵亡き今、あんたはもううちとこの嫁やあらしまへん。そやさかい、出ていってもらいますよってに」
キヨは冷淡(れいたん)に言い放った。
「待っとぉくれやす。うちは善蔵はんが亡くなっても、この家の嫁どす。善蔵はんの忘れ形見もおいではるのに、出ていくなんてできまへん」
悪びれもせず、松枝は平然と嘯(うそぶ)いた。

（何と図々しい。この女は一体どないな了見なんや？……金か？）
「出ていってもらうからには、それ相当の金をあげるさかい」
「お金やおへん。ここに居たいんどす。お義母はんや千代のそばに居て、お世話したいんどす」
（何が世話や！いっぺんとして、千代を抱いたこともなければ、善蔵を看たこともあらへんやんか）
「あんたはんはまだ若いんやさかい、なんぼでもええ縁がおますがな――」
「お義母はん、お願いどす。千代の面倒もちゃんと見るさかい、どうか、ここに置いとおくれやす」
　松枝は三つ指をつくと、深々と頭を下げた。

2

結局、松枝を追い出すことができなかった。そして、それからも、松枝の外出が止むことはなかった。

そんなある日。松枝に抱かれた千代がけたたましい泣き声を上げた。

「やかましい！なんなのこの子。おつむがおかしいんちゃうん」

途端、放り投げるがごとく、千代を布団に置いた。

買い物から帰ったキヨは、残酷までの松枝のその様子を覗(のぞ)いて、愕然(がくぜん)とした。

……千代が殺されかねない。

そのことがあってから、キヨは臥薪嘗胆(がしんしょうたん)の策を練った。そして、松枝を呼ぶと、キヨは作り話を聞かせた。

「千代はおつむに異常があるらしいので、専門の病院に預けることにしたさかい」

キヨのその話に、松枝は残念そうに伏し目がちになると、憂える表情を演出していた。

そして、キヨに背を向けた途端、我慢していた含み笑いをすると、噴き出しそうになる

のを懸命に抑えて部屋に戻った。

――十八年の月日が流れた。田所聡は、友人に誘われて行った華道の発表会で松枝と出会い、恋仲になって七年を経ていた。

松枝より五つ六つ若い聡は、主導権を握る松枝に手綱を握られている格好だった。料亭の離れで逢瀬を重ねながらも、〝大人同士の関係〟を前提に、不即不離を貫いていた。

そんな折、父親の浩一郎に誘われて、久し振りに祇園の料亭に呑みに行った。

料亭〈月路〉は、浩一郎の馴染みの店で、女将の秋乃とは長い付き合いだった。

「社長はん、ご無沙汰どした。本日はおいでくださって、ほんまにおおきに」

紺地に白と黄の糸菊模様の付け下げを着付けた秋乃は、丁重に礼を述べた。

「久し振りやったな。野暮用重なってな、会いとうても会いに来られへんかった。堪忍してや」

恰幅のいい浩一郎が小さくなった。

「へぇ、許したる。聡はんも、ようおいでくださった。本日は新人の芸子はんが居るさかい、すぐ連れてきますよって」

秋乃は、聡が来るのを予知していたかのように、そう言って出ていった。

間もなく、雪見障子が開いた。そこには、雛菊のように清楚で、初々しい芸妓の姿があった。聡はハッとして、目を見開いた。

「千代菊言います。どうぞよろしゅうお願い申します」

千代菊は三つ指をついて深く頭を下げた。

「おう、こら可愛い。さあさあ、こっちに来なはれ」

上機嫌の浩一郎が手招きした。

千代菊は、長い裾をぎこちなく引きずると、聡の横にちょこんと座った。

「よろしゅうお願い申します」

大きな黒い瞳を聡に向けると、銚子を持った。

「ああ。よろしく」

猪口を手にした聡が千代菊と目を合わせた。

――千代菊に出会ってから、聡は頻繁に〈月路〉に通うようになった。

「千代菊はいくつになる」

「十八どす」

「……十八か。一回り以上も違うな」

聡が憂えを帯びた表情をした。

「やけど、聡はんはまだ二十代にしか見えまへん」
「ハハハ……。千代菊はおだてるのが上手(じょうず)だな」
聡は満更でもなかった。
「おだててなんかいてはらへん。ほんまに二十代にしか見えへんもの」
千代菊はムキになって、上目で見た。
聡は面食らった。千代菊のその目は、若さ特有の一途(いちず)さのようなものを思い起こさせた。
「……分かったよ。ありがとう」
聡は照れ臭そうに鼻で笑うと、子供を宥(なだ)めるかのような目を向けた。すると、千代菊が白い歯をこぼした。
「……ところで、千代菊はどうして芸子なんかに?」
酌を受けながら訊いてみた。すると、突然、注いでいた千代菊の手が止まった。
「……両親早うに亡くなって、遠い親戚に育てられました。……やけど、あんたにかかったお金は、働いて返してもらうさかいって。……あの家から一日も早う出ていくには芸子になるしかなかった……」
千代菊は辛(つら)そうな顔で俯(うつむ)いた。
「……苦労したんだな」

聡は、我が事のように憂える表情をした。
「……聡はんは京訛(なま)りがあらへんどすなぁ」
ふと気付いて、千代菊が訊いた。
「ああ、大学は東京だ。少し働いていたし。そのせいだろ」
「ほな、うちにも東京弁、教えとぉくれやす」
「ああ。けど、僕の東京弁が正しいかどうかは保証できないよ。それでも良ければ」
「うん。それでええ」
千代菊が目を輝かせた。

3

――最近逢ってくれない聡に、松枝は苛立(いらだ)っていた。焦燥(しょうそう)に駆(か)られ、結局、お互いに禁じていた電話をしてしまった。

「はい、田所どす」

既に聡の母親は亡くなっている。電話に出た中年の女は、家政婦だと推測できた。

「聡はんは居てはる？」

「どなたはんどすか」

「戸田松枝言います」

「聡はんはまだ帰ってまへんが」

「帰られたら電話くれるように伝えとぉくれやす」

「電話番号は？」

「知ってます」

無愛想(ぶあいそう)に言い捨てると、電話を切った。

だが、その日、聡からの電話はなかった。益々(ますます)、松枝の苛立ちは募(つの)った。――翌日、会

社にも電話をしたが、同様に不在だった。
……女ができた。
松枝は直感した。
……さて、どないすんか。
結局、探偵社に聡の素行調査を依頼した。――数日後、調査結果の報告書が届いた。
【田所聡氏は、祇園の料亭〈月路〉に頻繁に通っていますが、店を出たあとはまっすぐ帰宅しており、また、その後に外出している形跡はありません。したがって、女性の存在は確認できませんでした】
ったく、へぼ探偵！
松枝は腕組みをすると、苦虫を噛み潰したような顔をした。

その頃、聡は既に千代菊の借金を立て替えて、自宅から目と鼻の先で一緒に暮らしていた。
「今日は、鯛の刺身を買ってきたわ。聡さんの酒の肴にと思って」
割烹着姿の千代菊が、不慣れな手付きで大根を千切りにしていた。
「おい、気を付けろよ。危なっかしいな」
聡がハラハラしながら見ていた。

「大丈夫よ。料理も慣れなきゃね。アッ！痛っ」
「ほら、みろ」
聡は千代菊の手を持つと、血の付いた人差し指を口に含んだ。
千代菊と暮らす借家には、小さな庭も付いていて、縁側もあった。和風好みの聡にとっては居心地が好かった。
千代菊と暮らすようになってからも、聡は浩一郎に誘われれば〈月路〉に行った。それは、千代菊とのことを悟られないためのカムフラージュでもあった。
そして、会社から一旦帰宅し、勝手口から抜け出して千代菊に会いに行くのも、同じくカムフラージュだった。
今回の千代菊との件は、口が堅い秋乃を信頼して、内密に進めたことだった。

そんなある日。浩一郎が聡を社長室に呼んだ。
「戸田松枝ちゅう女を知ってるか」
浩一郎はソファに深く座ると、両切りの煙草を喫んだ。
「……はい」
聡は面目ないと言った顔をした。
「で、どうなってるんや」

「……どうって？」

口ごもった。

「頻繁に電話が掛かってきてるそうやないか。会社にも自宅にも」

「……」

「独身やさかい、女遊びは構わへんが、田所の名を汚すような真似はしな」

手厳しく念を押した。

「……はい」

聡には返す言葉がなかった。

……さて、どうするか。逢ったら逢ったで、執拗なまでの情交を求めてくるだろう。……千代菊に出逢ってからは、もう松枝に逢う気にはなれなかった。不器用な自分が嫌になるほど、それは、相手が直感できるくらいに露骨に冷遇した。どうすれば、あっさり別れてくれるのか……。

結局、松枝と逢って決着をつけるしかないと、聡は思った。

電話をすると、いつもの料亭の離れ家で待ち合わせをした。

待ちわびていた聡からの電話に、松枝は思わず狂喜乱舞した。早速、箪笥を開けると、小豆色に霞模様をあしらった付け下げを選んだ。衿を抜いて、銀色の帯を結んだ松枝の

着こなしは、いかにも垢抜けした元芸妓の風格があった。

「もう、いけずやわ。どないしてはったん？逢いとうて堪らへんかったわ」

手酌をしていた聡に抱きついた。だが、聡は反応を示さなかった。

「……どないしたん？なぁ、なぁ」

寄り掛かると、猫のように擦り寄ってきた。

「……別れてくれないか」

聡が重い口を開いた。

「！……やっぱし、女がいてはるんやね」

松枝は一変して、般若のような顔になった。

「大人同士だろ？冷静に話し合おう」

聡は泰然自若と構えた。

「いやや、いやや、いやや」

松枝がすがるような表情で求めてきた。

「悪いが、帰る」

話にならないと思った聡は、松枝の手を払いのけると、腰を上げた。すると、松枝は挿していた平打ち簪を手にした。

「待ちなはれ！あんはんを殺してうちも死ぬえ」
その言葉に、聡は足を止めたが振り向かなかった。
「……好きにすればいい。俺はあんたの望みを叶えてやれない。だから、あんたの気が済むようにすればいい」
背を向けたままで言った。松枝の手は震えていた。――短い沈黙があった。やがて、松枝は泣き叫びながら逃げるように出ていった。
聡は腰を下ろすと、ぐったりとした。

帰宅した松枝は、失意の中、魂が抜けたように一点を見つめて、その挙動を不審にしていた。
その様子を覗いたキヨは、画竜点睛（がりょうてんせい）のための一芝居（ひとしばい）を打った。数日後。
「松枝はん。千代におうてもらいますよってに」
「……千代って、あの、おつむの病気で、精神病院に入ってる人やん？昔、昔。……そうや、お義母はんのお孫はんどしたなぁ」
松枝の言動は不可解だった。

4

――ドアが開いた病室のベッドで、何やら童謡を口ずさむ長い髪の少女が、あやとりをしていた。

「千代。松枝はんが来てくれたで」

キヨのその言葉に、少女がゆっくりと顔を向けた。途端、

「ヒェーッ！」

松枝が悲鳴を上げた。

白粉（おしろい）をべったりと塗った真っ白い顔に真っ赤な口紅を塗った少女が、にぃーっと笑った。

「あやとりしまひょ。ねぇ、あやとりしまひょ」

松枝を誘った。

「ち、ち、ちゃう！うちちゃう。うちは殺してへん。いゃーっ！」

松枝は、訳の分からないことを喚（わめ）いて後ずさりすると、逃げるように出ていった。

そんなある日。聡は浩一郎と差しで話をした。
「……結婚したい人がいます」
聡は真剣な顔つきを構えた。
「千代菊か」
浩一郎がズバリと当てた。
「あ、……はいっ」
咄嗟に浩一郎を視た。
「あかん。嫁に芸子はあかん」
「どうしてですか。田所の名誉ですか」
聡は何年か振りに熱くなっていた。
「そのとおりや。千代菊は妾にしときなはれ。結婚相手は毛並みが良ないとあかん」
頑迷固陋なる浩一郎の偏見が聡は鼻に付いた。
「分かりました。そしたら、田所と縁を切らせてください。それから、会社も辞めます」
聡は覚悟を決めると、ソファから腰を上げた。
「ちょい待て！本気で言うてるんか」
浩一郎が狼狽えた。
「ええ、もちろん本気ですよ。息子の見る目を信じられない親に、ついて行ける訳がない

でしょ?」
聡は理路整然と言った。
「うむ……。勝手にしなはれ」
浩一郎は面白くない顔をすると、横を向いた。
「三十二年間、ありがとうございました」
聡は頭を下げると、居間から出ていった。
当座の着替えを旅行鞄に詰め込むと、住み慣れた家を後にした。

千代菊との愛の巣に到着すると、何だか旨そうな匂いがしていた。割烹着に身を包んだ千代菊が、笑みを湛えて迎えてくれた。
「お帰りなさい。あら、旅行?」
提げた鞄を視た。
「……家出してきた。今日からここが我が家だ」
聡は腹を決めた。
「ほんまに?うれしいわ」
華奢な千代菊が聡の首にぶら下がった。
料理は苦手な千代菊だが、料理本を見ながら、聡のために心を込めた。

「すき焼きと、ほたての和え物を作ってみたの」
千代菊は心配そうに、聡の食べる顔を眺めていた。
「うむ……。うまい」
割下が少し甘かったが、不味くはなかった。
「えー、ほんまに?うれしいわ」
「千代菊は、東京弁と京都弁がごっちゃになってしまったな」
「そやかて、折角、聡はんに東京弁教えてもろうてるのに、使わな勿体ないもの」
すき焼きの焼き豆腐を口に運びながら、千代菊が上目遣いをした。
「それは構わないが、なんだか可笑しくてな」
「いけずやわ。もっと上手になるさかい、待っとって」
「ああ、期待してるよ」
教え子ができたみたいで、聡はくすぐったかった。

一方、あれほど出歩いていた松枝は、部屋に閉じこもり、独り言を呟いたり、訳の分からない童謡を歌ったりと、小粋だった芸妓時代の面影はどこにもなかった。

キヨは、千代に会わせた時の松枝の言葉が気になっていた。

「うちは殺してへん」

一体、誰のことを指して言ったのか。……まさか、善蔵のこと？だか、菅井は不治の病だと告げた。

菅井に確認することにしたキヨは、徒歩二十分ほどの〈菅井医院〉へ行った。〈菅井医院〉は、亡夫の亀吉の主治医で、菅井の父親の代からの付き合いになるが、善蔵の死後は菅井とは会っていなかった。

待合室には誰もおらず、院内は閑散としていた。奥から出てきた菅井は、キヨの顔を視た途端、驚いた顔をしたが、すぐに平静を装って、目を笑わせた。

「ご無沙汰しとります」

キヨが深々と頭を下げた。

「こらこら。お元気そうで何よりどす」

当時は黒々としていた髪も、鬢には白いものがあった。アイロンの折り目がない着古した白衣から、世話を焼く人が身近に居ないことが察知できた。

「……善蔵のことで――」

キヨのその一言で、菅井は向きを変えると、診察室のノブを握った。――カルテを捲る菅井に落ち着きがなかった。

「……善蔵はほんまに不治の病やったんでっしゃろか」

「どないしたんどすか?今頃になって」
菅井は手を動かしながら、キヨを見ないで訊いた。
「へぇ。なんでか知らへんけど気になるもんどすさかい。……殺され――」
「いぇ!不治の病どす」
キヨの話が終わらないうちに、そう、強く断言すると、キヨを睨(にら)んだ。キヨは息を呑むと、眼球を覆っていた瞼(まぶた)を上げた。……あの、穏やかな菅井と同じ人間と思えなかった。
「当時の医学では病名が分からんかった。そやから、不治の病とだけ告げたんどす。すんまへんけど、患者はんの予約入ってますさかい」
菅井はそこまで言うと腰を上げて、キヨに背を向けたまま棚の資料に指を置いた。
「……突然にすんまへんどした。ほな」
菅井の背中に挨拶をした。
……あの、狼狽(うろた)えぶりは何だ?……善蔵は殺されたというのか?……一体誰に?仮に殺されたとしたら、菅井はなぜ、不治の病と診断したのか?もしかして、誰かと共犯なのだろうか……。
信じていたものが、音を立てて崩れた。不安と戦慄(せんりつ)の中で、キヨは激流に呑み込まれた思いだった。

5

真新しい布団の中で、傍らに寄り添う千代菊の洗い髪の匂い嗅ぎながら、聡はその思いを口にした。

「……夫婦にならないか」

「えっ？」

千代菊が驚いた目を向けた。

「ここで、所帯を持とう」

千代菊は嬉しかった。だが、複雑な胸の内を明かせないのが苦しかった。

「……うれしいけど……」

「けど、なんだ？俺じゃ駄目か？」

「ううん。聡はんは素敵な人や。けど、うちなんかあかん。聡はんにはもっとお似合いの人がいてはる」

千代菊は涙を堪えた。

「……何か、隠しているのか？」

「堪忍しておくれやす」
背を向けた。聡は千代菊の肩を持つと、自分のほうに向けた。
「お前が、貧乏人の娘でもなければ、借金のために芸子になった訳でもない。そんなことぐらい分かっていたさ。貧しい生活をしていた人間が、平気で鯛の造りや牛肉を買わないからな。それは、食べ慣れた人間の習性がさせる自然の行為だ。つまり、お前は贅沢を極めた生活をしていたと言うことだ。……どうして、嘘をついて俺に近づいた？」
「……」
聡は、目を伏せて歯を食いしばる千代菊を見つめた。
「千代菊、答えろ！」
千代菊の肩を揺すった。
「堪忍しておくれやす。……言えまへん」
「目的はなんだ！若いお前が体を張ってまでして俺に近づいたのはなぜだ？」
千代菊は泣いていた。聡は、千代菊の涙を指で拭ってやると、大きくため息を吐いた。
「……お前を責めてる訳じゃない。真実を知りたいだけだ」
千代菊から手を離すと、仰向けになった。
「……松枝を苦しめるためどした」
背を向けたままで言った。

「!……何っ?」

千代菊の黒髪に顔を向けた。

「……松枝は、うちのお父さんの後妻どす」

「!……」

聡は、千代菊のその一言で、自分に近づいた目的を理解すると、困惑の面持ちで長大息をした。

そして、千代菊こと千代は語り始めた。

「松枝のことを祖母から聞かされたのは、私が十六のときどした。松枝はおとんが病気で苦しんでるのに、看病もしいひんで外出ばっかりしとったそうどす。おとんが亡くなったときも家にはいーひんかった。おとんが亡くなっても籍を抜かへんかった。

松枝の目的はうちとこの財産やと思た祖母は、うちの身に万一のことあるかもしれへん思て、乳母の家に預けたんどす。乳母の家はうちから歩いてすぐのとこやったさかい、毎日のように祖母が遊びに来てくれました。

うちは乳母の家で何不自由のう育てられました。……祖母から松枝の話を聞いたうちは、松枝を憎んだ。松枝を苦しめるためにどうしたらええか、考えました。

ほんで、高校を卒業すると、復讐するために松枝の身辺を調べました。すると、頻繁に会うてる男がいてはった。……それが、聡はんどした」

「……」

聡は俯せになると、煙草に火をつけた。

「うちは思た。愛する人を奪われたら、松枝は悲しむやろうなと。そこで今度は、聡はんを尾行した」

「……」

「すると、頻繁に〈月路〉に通ってるのを知った。復讐方法を考えてると、乳母から意外なことを聞いた。〈月路〉の女将はんと知り合いやったんどす。乳母の口利きでにわか芸子になると、聡はんを奪う計画を立てたんどす」

「……」

聡は煙草をもみ消した。

「計画どおり、聡はんにほかされた松枝は、あまりの悲しみで気が触れんばっかりになってもうた。松枝の様子は、祖母から伝った乳母からの情報で知ってました。

ほんで、最後に松枝の精神をおかしゅうするために、祖母の知人の精神病院で、真っ白い顔に真っ赤な口紅を塗って、うちがアホの真似をしたら、松枝はほんまに気ぃ変になってもうた。

……聡はんと引き離して、松枝を苦しめれば、うちの復讐は終わりどす。おとんの無念も晴らすことできた。……そやけど、聡はんを愛してもうた。離れられんようになっ

てもうた」
「だから、結婚しようと言ってるじゃないか。こっちを見てごらん」
　その言葉に、躊躇(ためら)いがちに向きを変えた千代は、目を伏せていた。
「……目的はともあれ、今はこうして互いに愛し合っているんだから、それでいいじゃないか。な？」
　千代はゆっくりと、聡と視線を合わせた。そして、笑顔になった。
「ええの？ほんまにうちでええの？」
　聡の胸にすがった。
「ああ。お前じゃなきゃ駄目だ」
　千代を強く抱き締めた。
「……聡はん」

　その頃、聡という片腕を失った浩一郎は、仕事に支障を来していた。どうしても引き戻す必要があった。聡の居場所を知るには、秋乃に訊くしかなかった。
　江戸紫の付け下げに平安絵巻調の帯を、秋乃は粋に着こなしていた。
「単刀直入に訊くが、聡の居場所を知らんか」
「そんなん訊きに、わざわざおいでになったんどすか？電話一本で済むやないどすか」

酌をしながら皮肉を込めた。
「あんたにも会いたかったさかいだ」
「おおきに。そやけど、聡はんの居場所は簡単には教えられまへん。聡はんとの約束どすさかい」
「そんなん言いなや。わしとあんたの仲やないか」
「えらい昔のこっちゃあらへんどすか。うちを脅す気どすか」
「そないにいじめなや。どないしたら教えてくれるんや」
「さあ、どうしまひょ」
横を向いた。浩一郎は秋乃の手を握ると引っ張った。
「痛っ。なんどすの？」
「ええさかい、こっちにおいで」
「いやや」
「ええさかい」
「……いや」
綱引きのように引っ張られた秋乃の体は、浩一郎の胸元で止まった。

6

松枝の容態は日毎に悪化していた。髪を乱し、着崩れしただらりの帯で、家の中を徘徊していた。その日も、裸足で庭に入ると、菊に鼻先を近付け、匂いを嗅いでいた。

「桃色の花はめんこいーな。うーん、ええ匂いやわ」

そう言って薄桃色の小菊を手折ると、髪に挿した。

「お義母はん、どや？似合うてます？」

障子を開けた部屋で裁縫をしているキヨに話し掛けた。

「……へぇ。よう似合うてます」

キヨはそう答えながら、踊り子のように舞っている松枝を哀れに思った。

（そろそろ、入院させたほうがええ。……その前に、菅井のこと訊いてみよう。こないな状態では、まともな回答は得られへんやろうが）

「……松枝はん。菅井先生を知ってはるか？」

「……すがい？……ああ、お医者はんな。うちが芸子のころ、よう遊びに来てくれはったわ」

（！……繋がった。松枝と菅井が繋がった）
「善蔵のことは？」
「ぜんぞう？……」
「亡くなった、あんたの夫や」
「！うちやないっ！殺したんはうちやないっ！」
松江は取り乱すと、汚れた足で廊下を走って行った。その度に揺れるだらりの帯を見ながら、キヨはこう推測した。松枝にぞっこんだった菅井は、松枝の言いなりになり、善蔵に毒を盛った。医者なら、薬を使って生かすも殺すも自由にできる。……何のために。——遺産を手に入れるためだ。だが、それは推測に過ぎない。ましてや、善蔵がこの世を去ってから長い年月を経た今、それを証明することはできない。キヨはため息と共に肩を落とすと、項垂(うなだ)れた。

その夜、愛の巣に予期せぬ来客があった。それは、土産(みやげ)を提げた浩一郎だった。
「……お父さん」
聡が驚いた顔をした。
「入らしてもらうで」
浩一郎は勝手に入った。

「……社長はん、おいでやす」
千代が三つ指をついた。
「千代菊、元気どしたか？上がらしてもらうで」
革靴を脱いだ。
「へぇ、どうぞ。散らかしてますけど。今、お茶を淹れますよって」
「茶はいらん。酒にしてくれ。人肌の燗や。寒うなったさかいな。ガッハッハ」
浩一郎は豪快に笑った。
「へぇ。つまみも作るさかい、座っておくれやす」
押入れから座布団を出した。
「寿司も買うてきたで」
ちゃぶ台に置いた。
「おおきに」
千代は礼を言いながら、割烹着を纏った。
聡は諦めたようにため息を吐くと、浩一郎の前に腰を下ろした。秘密にしていた愛の巣を教えたのが誰なのかは、言わずと知れた。浩一郎を見ると、悠然と煙草を喫んでいた。
「なんの用だよ、突然に」

聡は無愛想に言った。
「親が子供のとこに来たらあかんのんか？」
「親子の縁を切ったんじゃなかったのか？」
「わてはなんも言うてへん。あんたが勝手にほざいた台詞やあらへんか」
「……それで、なんの用だよ」
聡は苛立っていた。
「そないに慌てな。酒呑みながら話すさかい」
「……」
聡は横を向いた。
「社長はん、おまちどおさまどす」
千代が徳利と猪口を運んできた。
「おお、白い割烹着がよう似合うてますなぁ」
浩一郎が褒めた。
「えっ、ほんまどすか？おおきに。うれしいわ」
千代も調子に乗っていた。聡は一人、愉快ではなかった。
「ほな、どうぞ」
千代が酌をした。

「おう、こらあ、うれしいな。聡、あんたも呑みなはれ。いつまでもそないな仏頂面してへんで」

これ以上の口論を避けたかった聡は、仕方なく猪口を手にした。

「千代菊も呑みなはれ」

浩一郎が勧めた。

「社長はん。うち、まだ未成年どす」

「……そやったな。すまんすまん。ガッハッハ」

浩一郎は高笑いしながら、責めるような目を聡に向けた。「お前が嫁にしたいという女はまだ未成年なんだぞ」そんなふうに言われているようだった。「じゃ、そう言うあんたはどうなんだ?芸子は妾にしろと嘯いたじゃないか。あんたに俺を責める権利はない」と、聡は腹の中で反論した。

千代が作った夕飯の余ったおかずをつまみにしながら、味音痴の浩一郎は旨そうに酒を呑んでいた。――その時だった。突然、浩一郎が話を変えた。

「千代菊はん。あんた、かの有名な〈戸田酒造〉のお嬢はんやったんどすなぁ?」

「えっ?……ええ」

千代は小さく返事をして、俯いた。

「聡、なんで最初に話してくれへんかったんや。それを知っとったら結婚を承諾してま

したがな」

聡を見ながら、白菜の漬物を口に入れた。

「また、あんたの言う、毛並みか？家柄で結婚する訳じゃないだろ。それに、あんたに話した時は、千代菊のことはまだ何も知らなかった」

「戸田千代はんや」

浩一郎が即答した。……千代菊の本名を浩一郎の口から聞かされるとは思わなかった聡は、自分が知らない千代のことを知っている浩一郎に腹が立った。傍らの千代が、申し訳ないと言うような目で聡を見るとすぐに視線を落とした。

「で、式はいつにする？」

浩一郎のその言葉に驚いた聡と千代は、同時に目を合わせた。——その夜、菅井が自殺をした。遺書はなかった。

翌日、キヨに結婚の報告をするために、千代は聡を伴って実家に赴いた。

「お祖母ちゃん！」

千代の声に、キヨが急いで廊下を来た。

「千代、よう来てくれた。元気にしとったか？早う入りなはれ」

千代の腕を握った。

「……聡はんも来てはる」
口ごもった。
「……しゃあない。呼びなはれ」
キヨは、松枝の男だった聡に好意を持っていなかった。
「聡はん」
千代の声に、聡が玄関から顔を出すと、深々と頭を下げた。
「挨拶はあとや。さあ、二人とも中に入りやす」
キヨは忙(せわ)しく手招きした。そして、居間に行くと、松枝の様子を話して聞かせた。
三人が松枝の部屋まで行くと、何やら童謡が聞こえてきた。
「松枝はん、開けますえ」
障子を開けたそこには、髪を乱した松枝があやとりをしていた。
「松枝はん」
キヨの声に振り向いた松枝を見て、三人は一斉に後ずさりした。真っ白い顔に真っ赤な口紅を塗っていたのだ。それは、千代が精神病院で演じた白痴(はくち)を彷彿(ほうふつ)とさせた。だが、松枝は演じている訳ではなかった。
「あっ、聡はんや。逢いに来てくれはったん?うれしいわ」

抱きつこうとした松枝を聡は避けた。すると、松枝はよろよろと廊下に倒れた。

「……そないにいじめんといて。殺したんはうちちゃう。……あらっ、千代がおる。なんで千代がここにおるん？千代はおつむがおかしなって病院におんねん。……そうや、あやとりしまひょ。なあ、あやとりしまひょ」

松枝は徐(おもむろ)に立ち上がると、指に赤い毛糸を絡(から)めて、千代に歩み寄ってきた。千代は聡の後ろに隠れた。

「アハハハハ……」

松枝は笑い声を上げると部屋に入り、背を向けて横座りをした。そして、何やら童謡を口ずさむと、一人であやとりを始めた。

三人は目を合わせると、言葉にできないそれぞれの科(とが)を内に秘めながら、松枝の背中に憐憫(れんびん)の眼差(まなざ)しを向けた。――間もなくして、松枝は精神病院に入院した。

金太郎のよだれかけをした赤子を抱いた千代が、聡を伴ってキヨに会いに来たのは、庭の山百合(やまゆり)が芳香を放つ頃だった。――

完